

[03_05]九州大学大型計算機センター広報 : 3(5)

<https://doi.org/10.15017/1467970>

出版情報 : 九州大学大型計算機センター広報. 3 (5), pp.1-42, 1970-10-12. 九州大学大型計算機センター
バージョン :
権利関係 :

随 想

鹿児島大学連絡所 浦野 芳

計算機室の窓から外をながめると、青く澄んだ空に美しい巻雲が見える。ああもう秋だなと思う。あの空を飛んでみたいという夢をもった多くの人々が、いろいろ工夫して、飛ぶことを試み、ある日成功した。この成功は夢が実を結んだものであるが、一方ではそれを支える技術的基礎があつてはじめて可能になったのである。

計算機の発明・発達についても同じことがいえるだろう。そして人々の心に計算機利用についての夢があり、また科学技術のためぬ進歩があるかぎり、計算機は今後ともますます発達するだろう。

ところで、ときどき「電子計算機では何でもできるのか。」という質問を受ける。勿論否と答えるのだが、「それではどんなことができないか」ときかされると、私は返事に困ってしまう。かりに今私がこんなことは難しいだろうといくつか例をあげるとしても、何年か後には、それらはたいてい解決してしまいそうに思えるからである。私は人間の精神活動の中で、その過程が細かく分析できるものは原則として計算機で処理できると思っている。

例えば、小学校の一年生に「あいうえお」という文字のお手本を与えて、それを書かせるでしょう。彼等はお手本をまねて書くだらうが、その書いたものは、百人百様、大きさ、形ともにお手本とはちがったものになっているだろう。しかし彼等はお互に「あいうえお」と読むことができる。しかしこんな簡単なことでも、それを計算機に読ませようとすると、非常にむずかしいことになるだろう。郵便番号読取機は、ある限られた文字を、変形がある限られた範囲にある場合にだけ、読みとることができるにすぎない。しかしいつかは計算機はいろいろの文字を、読みとることができるようになるだろう。

次に人の声を聞いて、その声の発声者を認識するという問題を考えてみる。私は声によって人を認識するというのが、どのような精神作用の過程によるのか知らない。そして声によって人を識別することは、今のところ、計算機にはちょっと手におえない問題であるように思われる。しかしいつかは人の声の特徴の分析が行なわれて、この問題も計算機による処理可能の範囲に含まれてしまうだろう。このように、個々の精神作用をとりあげてみると、それらはいつかは分析可能になり、したがって計算機による処理可能の範囲に含まれてしまいそうである。しかし人間の精神作用の中には、これとはっきり指定されることを許さず、したがって計算機による処理を永久に拒否しつづける分野が、いつまでも残るように思われる。

ところで計算機の利用は、今後いろいろの方向にのびていくであろうが、私は予測という分野に、

もっとのびて行ってよいのではないかと思う。現在でも、GNPののびや物価上昇率の予想、あるいは選挙の結果の予想等に利用されているが、その応用の範囲をもっと広げることができると思う。例えば、国がある政策を立案するとき、その問題に関係のありそうな客観的資料を選択収集し、その客観的資料をもとにして、適当な方式でその政策を実施したときの結果を予測する。その場合、どのような資料を必要とするか、またどのような方式で結果を予測するかについては、専門家の検討にまたねばならぬが、その予測と実際の結果とを比較しながら、集めるべき資料の選定および予測の方式を再検討して、改良を加えていく。このようなやり方を進めていくことによって、我々は何をどの程度に予測できるか、またできないかが、だんだん明らかになっていくであろう。そしてイデオロギーの異なる政党間の政策の比較が、共通の土俵の上で、具体的な数値をもって、論ずることができるようになるかもしれない。

秋の空は変わりやすい。とりとめもないことを考えているうちに、先ほどまで見えていた美しい巻雲は黒い雲に隠れてしまって、小雨が降り出した。